

Hyatt New Brunswick(周りに名所は何もない)に宿泊し、シャトルバスで会場を往復した。海外からの参加者は、レンタカーを借りない限りは他に交通手段がないので、会場から離れることが殆どできなかった(実際、朝食も昼食も会場が準備した)。しかしそれが逆に幸いしたのか、セッションならずとも多くのローカルコミュニケーションが至るところで行われていた(つまり缶詰状態)。初日のBanquetもHyattで行われ、大いに盛り上がった。

本会議に関する情報は以下をご覧ください。

<http://www.iwvr.org/>

◆ ECVP 2003 参加報告

伊藤裕之

九州大学



2003年9月1日から5日にかけて、ヨーロッパにおける視知覚の国際会議であるEuropean Conference on Visual Perception(ECVP) 2003がフランスのパリで開催された。これは、毎年5月にアメリカのサラソタで行われるVision Science Society(VSS) Meetingと対をなす視知覚研究に関する総合的な会議で、最新、最先端の情報を収集するには手ごろである。会場はパリ第5大学で、ノートルダム寺院から歩いて10分ほどの街の中心部にあり、建造物としては歴史を感じさせてくれるものであった。ECVPの開催地は毎年変わり、ヨーロッパを転々とするので、何度参加しても新鮮であるが、VSSに比べるとのんびりした雰囲気がある。

この会議がカバーする範囲は、色や明るさの知覚、形や大きさの知覚と錯視、視覚的運動の知覚、3次元対象の認知、顔や表情の認知およびそれらの相互作用と脳内の処理過程の研究やそのモデル化、さらに他の感覚との相互作用や視覚障害、視覚芸術の研究までと幅が広い。心理学、工学の他、生物学、生理学の分野の研究者も参加しているものと思われる。立体映像が必要な研究や動作がからんだ研究に

はバーチャルリアリティの技術もよく用いられている。

会議はP. Cavanagh(ハーバード大)の講演"The language of vision"で開幕し、ジャーナルPerceptionの創設者としても知られ、80歳まで現役で研究を続けてこられたR. L. Gregoryの錯視についての講演で幕を閉じた。その間、招待シンポジウムを含めて口頭で156件、ポスターで324件の発表があり、毎日朝から晩まで2つの会場で平行にスケジュールが組まれていた。日本からの参加者はポスター発表が中心ではあるが、数を国別で集計するとなんと第4位の多さで、開催国フランスより1人少ないだけである。何名ものVR学会会員の方が発表されており、大学院生の参加も目立った。

近年、この会議においてはマルチモーダルな現象への関心が高まっているように思われる。視覚と聴覚、あるいは視覚と触覚(あるいは動作)のインタラクションにおける脳内の処理過程についての実験的研究が増えてきている。私が個人的に最も印象に残っているShimojo氏(VR学会会員)のプレゼンテーションも、視聴覚の相互作用と脳の処理過程を扱ったものであった。大脳への非侵襲的アプローチも盛んになっている。fMRIを使った研究は当然のごとく行われており、もはや珍しくない。今後は、磁気刺激を使って、大脳の視覚情報処理過程に積極的に関与する研究が増えることも予想される。注意や知覚学習なども近年特に増大した研究テーマであり、まだしばらくブームが続きそうである。どの分野の研究も、基本的には人間の視覚(あるいは脳)のメカニズムを探ることを目的としており、モノを作ることは全く念頭においていない(ように思える)ので、VR学会会員の皆様にとっては興味のわからない研究も多いかもしれない。

次回2004年はハンガリーのブダペスト、2005年はスペインにて行われる予定である。余談であるが、開催地は以下のようにして決定される。開催地の立候補者が、それぞれ自分のところがいかに会議に好都合か、会議中のビジネスミーティングでプレゼンを行い、討論の後、会場全員の挙手で決定される。街の歴史的背景や交通事情、会議場の設備、宿泊施設の豊富さ、スタッフの優秀さといったことから、食べ物が美味しいだの、ビーチまで歩いて何分だの、景色がよく観光にも好適であるなどといったことが美しいスライドを用いて述べられる。討論もかなり気合がはいっている。学術的な発表よりこちらの方がおもしろいなどと言ったら叱られるであろうか。なお、本会議のアブストラクトは、ジャーナルPerceptionのSupplementや、以下のURLにおいて読むことができる。<http://www.perceptionweb.com/ecvp03/index.html>